

図書館友の会けやき ニュースレター 2019.7.26

けやき20周年 誰もが使いやすい図書館をめざして —20年前の“初志”を想う—

近頃、「ニューヨーク公共図書館」という映画が話題になっている。ニューヨークの中心部に位置する本館と3つの研究図書館が所蔵する6000万点ものコレクションで名高い図書館である。しかし、このドキュメンタリー映画が主に取り上げているのは、あらゆる住民・利用者のニーズを積極的に掘り起こし、それに応えるために本館や88の分館で多彩なプログラムを展開する、ニューヨーク公共図書館の「人々のための図書館」という側面だ。アメリカでは、図書館には“People's Palace=普通の人たちのための宮殿”というニックネームがあるという。

20年前から、私たちが「あらゆる人に開かれた図書館」を渴望している。本や講演会などで、このニューヨーク公共図書館を始め海外の図書館のことを知るたびに、また、国内で新設された図書館の話を聞き見学するたびに、「ええなあ」とその地域に住む人々を羨むことしきりであった。しかし、羨んでいるだけでは何も変わらない。地元の図書館が少しでも理想の図書館に近づいてくれるよう、「私たちが声を挙げ、実際に動こう」と1999年に立ち上げたのが、この「図書館友の会けやき」の活動である。

初期のけやきニュースレターでは、まさに映画「ニューヨーク公共図書館」で紹介されている多彩なプログラムと同じものをテーマに特集を組み、左京図書館をはじめ京都市図書館に市民・利用者の願いを届けている。第2号の特集のテーマは、「誰もが使いやすい図書館をめざして」。その後の10年間の主なテーマは、車椅子での図書館利用、夜間開館、小学生の図書館見学、講演会など大人向けの行事、夏休み自習会、映画上映会、図書館廃棄本のリサイクル、コンピューターによる図書館ネットワーク、視覚障がい者へのサービス、多文化共生、多言語対応サービス、赤ちゃんにもやさしい図書館作り、利用者のニーズを考える、ビジネス支援サービス、図書館のつどいの場としての機能を考える等々。

この20年間に、我々を取り巻く情報環境は大きく変わった。資料も、紙に印刷されたものだけでなく、AV資料や電子書籍、インターネットからの情報など、様々だ。しかし、私たちが公共図書館に求めるものは変わらない。これからも、「誰もが使いやすい図書館」「普通の市民が集う宮殿」の実現をめざす市民・利用者として、活動していきたいと思う。

(図書館友の会けやき代表 永井麻里)

特集 あなたに届けたい おすすめの本 12 冊

自分だけではもったいない！たくさんの人に読んでほしいと思った本。けやき会員やゆかりのある皆さんが紹介します。気になる本があれば、ぜひ図書館で探してみてください。

ほの暗い永久^{とわ}から出でて 生と死を巡る対話

上橋菜穂子・津田篤太郎著 文藝春秋 2017 年

『精霊の守り人』などの作者であり文化人類学者でもある上橋菜穂子さんが、最愛のお母様の病と闘っておられた時に、巡り合った一人の医師。津田篤太郎さんは、西洋医学と東洋医学の両刀使いで医療に携わっておられるお医者さんでした。

年齢を重ねていくと、自分自身の身体の変化を感じる場合があります。細かな文字が読み辛くなったり、朝起きると身体がこわばってすぐに動けなかったり。また、親しい人が一人、また一人と亡くなっていってしまいます。時には、一緒に年老いていくはずの同級生が突然逝ってしまうこともあるのです。

命は限りあるものと、頭ではわかっているつもりですが、死、というものをどう受け止めるのかは、とても難しい。

大切な命と、逃れられない死について、全く違うキャリアを持つ二人が、「思考のキャッチボール」をしてできあがった往復書簡が、本作品です。

—生物の身体のコシステムは、驚くべき精密さで命を支えながら、その一方でまた、驚くべき精密さで、個体の命を終えるようにしている。— (P.17・P.70)

私はこの文章にはっとして、これまで漠然と抱えていた不安が、すんと、とどこかに落ちていたように思えたのです。

なんのための生なのか、なんのために死ぬのか。作家・文化人類学者からの問いかけに、西洋と東洋の両方の医学を取り入れる医師の返答は、まさに「思いがけない角度から飛んでくる球」のようです。

お二人の話題は、生物の在り様から AI のことまで、多岐にわたっていますが、特にハンガリーの指揮者フェレンツ・フリッチャイの逸話は印象的です。乗り気でないオーケストラの団員が、彼の丁寧で根気強い指示に導かれ、メキメキと良い音を出すようになります。曲のクライマックスで、彼はこうつぶやきます。「この箇所は“生きることは素晴らしい、と歌っています……そう、生きることは本当に素晴らしい……」

(京都市・㊦)

ヒート

堂場瞬一著 実業之日本社 2011 年

東海道マラソン 42.195km。低迷している日本長距離界の命運をかけて、日本人が世界最高記録を出すために用意されたマラソン大会がこの小説の舞台。

このマラソン大会の実行委員として運営、企画に携わるのが、神奈川県教育局スポーツ課職員の音無太志。音無は神奈川県知事の命を受け、好記録を狙えるフラットでカーブの少ないマラソンコースを夜間、休日に自転車、ランニングの試走で策定した。また、世界最高記録を叩き出すため、強いペースメーカーとして甲本剛に白羽の矢を立て、勝てるランナーとして山城悟を招集した。

甲本はハーフマラソンの元日本最高記録保持者。かつては実業団チームに在籍したが、不況によるチーム解散後は、午前中は弁当屋の工場で働き、午後から出身大学のグラウンドで練習する苦労人。フルマラソンでは、30km を過ぎると、スタミナ切れで目立った記録を残せていない。

一方、山城は箱根駅伝では学連選抜選手として区間新記録。実業団チーム入り後はフルマラソンの日本最高記録を叩き出し、走る度に日本記録を更新する日本最速のエリートランナー。自ら作成する練習メニューでトレーニングし、練習後は人と交わらず、我儘で利己主義を貫く。

ふたりとも最初は乗り気ではなかったが、音無や恩師の説得等により、東海道マラソンへの参加を決める。レースは序盤からふたりのマッチレースとなり、世界最高記録のペースで進んでいく。

通常の大会では、ペースメーカーは 30km 地点まで走り戦線離脱するのが一般的だが、甲本は 30km 地点を通過しても停まらずゴールを目指して駆け抜けていく。ペースメーカーの甲本とエリートランナーの山城、勝つのはどちらか。各々の意地とプライドをかけた戦いが繰り広げられていく。

読者は手に汗握る展開に、固唾を呑みながら最後まで一気に読み進めていくことだろう。スポーツ、恋愛、仕事で、誰にでも人生をかけて戦うことがあると思います。甲本にとっては、それが東海道マラソンです。この本を読んで自分の人生を振り返ってみてはいかがでしょうか。スポーツが好きな人におすすめの本です。（左京区・山口仁孝）

資本主義と民主主義の終焉

水野和夫・山口二郎著 祥伝社新書 祥伝社 2019 年

本書は、平成とはどのような時代だったのか、これからの時代はどうなるのかを、経済学者の水野和夫氏と政治学者の山口二郎氏が、分かりやすく分析しています。お二人の学者がそれぞれの得意分野を、縦横に、生き生きと述べています。平成の時代を六つの時代に区分した後、全体の特徴をまとめ、今後を予測し、提言をするものです。

平成の六つの時代区分は次のようなものです。①新時代

への期待－バブルとベルリンの壁、二つの崩壊、②危機感漂う世紀末－相次ぐ企業破綻から金融危機へ、③熱狂する国民－小泉政権と同時多発テロ、④新自由主義の席卷－リーマンショックと格差社会、⑤「神話」の崩壊－政権交代と東日本大震災、⑥長期政権と右旋回－そして、安倍一強へ、です。ダイナミックな歴史の動きと特徴が浮き彫りにされています。

平成の時代全体については、①冷戦が終わって新しい時代が来るという「理想が終わった時代」、②戦争経験を受け継ぐことが難しくなったという意味での「戦後が終わった時代」、③メディアの衰退が示すように「発展が終わった時代」という三つの側面があると指摘されます（山口氏）。経済的には、「ゼロインフレの時代」、「ゼロ金利の時代」であって、現在の低成長は必ずしも日本経済の「停滞」ではなく、「成熟」とみるべきだともされます。成長政策によって、格差が拡大し、富の集中と貧困化を生んでいるとも指摘されます（水野氏）。

今後の 10 年に向けた提言として、小選挙区の弊害（国会での議論が低調となり、与野党間での相互的寛容が失われるなど）を認識することなどの提言とともに、資本主義は終わっても、民主主義は終わらせてはいけない、という言葉が響きます。本書から、未来を見据える著者たちの熱い思いが伝わってくるようです。（左京区・はる）

クモ ハンドブック

馬場友希・谷川明男著 文一総合出版 2015 年

久しぶりに参加したクモの観察会で、講師の先生が紹介・推薦して下さったクモの図鑑。日本には約 1600 種のクモが生息しているそうだが、身近に生息する種・外見で区別が可能な種 100 種に絞って、それぞれを各 1 ページで

紹介。各ページの半分以上を占める白地バックの雌雄のクモの拡大全形図が、わかりやすく識別に役立つのはもちろん、迫力満点。原寸大図もちゃんと掲載されている。

クモは街中でもみられ、時には室内やベランダにもやってきて我々にも馴染みがある生き物なのだが、昆虫類と比べても興味を示す人は少なく、むしろ、その姿が気持ち悪いか毒があるのではと、敬遠されることが多い。私も、20 数年前に小学生の息子と一緒に参加した観察会で、クモの多彩な生態に出会い、クモとの距離が一気に縮まった。

本書の冒頭「本書の特徴・使い方」「クモとは?」「かんたん検索～網と体形からグループを特定」の項が、簡潔で初心者にも読みやすく、クモへの興味をかきたててくれる。生活様式―網（円網・立体網・ボロ網 etc.）を張るもの、張らないもの、地中に巣を作るものなど―の紹介や、クモの識別のための網・体型の図があり、クモの多彩さを知ることができる。イソウロウグモやトリノフンダマシなど個性的な生態をもつクモの紹介やクモの毒性についてなどコラムも随所に挟まれていて、携えてクモを探しに行くだけでなく、寝転んで斜め読みしても楽しい!?

持ち運びに便利な厚さ約 5mm の新書判サイズの本なので、あらかじめこの本を目指して行った人でなければ、図書館の書架から見つけ出すのは難しいが、左京図書館をはじめ京都市図書館も 6 冊所蔵。まず、一度手に取ってみて。

（会員・spider woman）

キャスターという仕事

国谷裕子著 岩波新書 岩波書店 2017 年

田英夫にはじまり、久米宏、田丸美寿々、金平茂紀、膳場貴子など。今ではよく知られた「ニュースキャスター」。

著者は、1993 年の NHK の番組編成を機に『クローズアップ現代』のキャスターに抜擢された。この本は、それに

至るまでと、『クローズアップ現代』の顔となってから、2015 年の暮れに突然降板を言い渡されて翌年 3 月に終わりを迎えるまでの 23 年間、真剣に仕事に向き合ってきた、ひとりの女性の記録でもある。

海外での生活が長い著者は、不自由な日本語を駆使しながら、「幅広いテーマを扱う」、「テーマに聖域を設けない」と熱い志に燃えるスタッフとともに、キャスターという仕事を模索しながら果敢に挑戦しつづけた。テレビの可能性についての考察や数々のエピソードを通じて、苦悶しながらも一瞬を大切に、キャスターとしての役割を探究してきた姿が、目に浮かぶようである。高倉健の沈黙の逸話も興味深い。一所懸命な著者あつての出来事なのだろう。一つの番組を作るのに、どれほどの時間と手間をかけてきたか、言葉を選んできたかがよくわかる。ものすごい営みが行われていたものである。

NHK の職員という観念をもっていた私は、大きな過ちをしていたことに気付かされた。積極的に番組をみななかったことが悔やまれる。

この番組が終了して 3 年以上が経った今、変わりゆく社会を考えるにあたり、著者がテレビに映っていたころと現在を比較してみるのは有意義なことだと思う。『クローズアップ現代』に代わってのリニューアルされた『クローズアップ現代+（プラス）』。

本のラストには、最終回の放送のことが書かれている。そのなかに最後のゲストである柳田邦男の「危機的な日本の中で生きる若者たちに八か条」が紹介されている。四半世紀近くこの社会における変化を見続けてきた著者だからこそ、その八か条の大切さがわかるのだろう。年配の方々にもぜひ読んでいただきたい。

希望がもてて読後感がいい。（左京区・K）

京都「私設図書館」というライフスタイル

田中厚生著 コトコト 2018 年

銀閣寺交差点にほど近い『私設図書館』は、満足して集中できる有料の自習スペースです。1973 年の創設以来、スタッフと利用者とが共有の静けさを大事に引き継いでいます。最近知って、私も愛用しています。

表題の本は、その私設図書館の館主が、自らの思索を平易で親しみやすい文章にまとめたものです。なぜそれを作ったのかという内なる問いに誠実に答えながら、型にはまらない生き方について書かれています。他人を羨まない作者の人生観からは、読む人が読めば、さまざまなヒントが得られると思います。

「そんなことをして何になる？」他人の忠告は、時にありがたく、時によからぬ思惑に満ちています。その忠告者は、無意識のうちに、相手にも自分と同じような生き方をしてほしい、これまでの苦労が間違っていないことを裏付けてほしいと願っていることがあります。さもなければ、自分が傷つけられた気になる、だから相手のすることにケチをつけたくることが。それをノイズだと感じないことに慣れてしまうと、いつしか他人の声でしか生きられなくなってしまいます。作者の願いはシンプルです。「他人の人生で他人の役に立つのではなくて、自分の人生で他人の役に立ちたい」と。その一つの実現が、私設図書館だったと。あとがきにはこうあります。

「お客様の後ろ姿を眺めながら、こんな感慨にふけることもある。大学受験の予習であれ、資格試験の勉強であれ、研究論文の執筆であれ、人が真剣に勉強される姿というものは美しいものだ」と。

変化する時代の中で学ぶ姿。そこにつねに変わらない美しさがあることに作者はしみじみと驚いています。何のために学び、努力するのか。本書は学びの社会性についてもヒントになるように思います。 (京都市・ひねもす)

本に読まれて

須賀敦子著 中公文庫 中央公論新社 2001 年

本が好きだ。本を読んでいるつもりが、いつの間にか読まれてしまっている。魂を持っていかれたようになって。そういう読書を経験した人は、まずこのタイトルに魅かれる。そして、装丁にも。味わいのある装丁に、思わず本を手に取り眺める。もちろんすぐにパラパラとめくる。そして 2、3 行読み進めると、すぐに須賀敦子の世界に引き込まれていく。

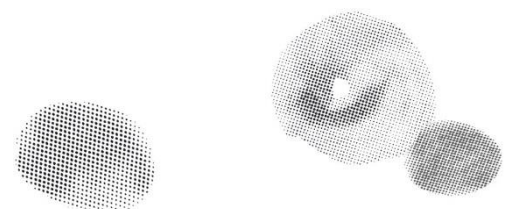
本を読むのは楽しいし、他の人がどういう風に本を読んだかを知るのもとても楽しい。須賀敦子の書評集は、透明で端正な文章で、本を読むこと、本への尽きない想いが、暖かく綴られているのだ。エッセイ風の文体で綴られる書評集は、それぞれの本の読みどころをぐっとつかんでみせ、読者は紹介された本を読みたいという思いにとらわれていく。

どんな心の危機にあっても、須賀敦子の本を読めば、心の乱れや、欠け落ちたところが修復され、静かに調律され、救われていくような、そんな不思議な安定のうちにあり、独特の世界が広がっていく。

内容は、1、書評から 2、好きな本たち 3、読書日記の、3 部構成から成る。読書家で、こよなく本を愛した須賀敦子の遺した、最後の読書日記である。

読後、やっぱり本に読まれていることは、幸せなんじゃないだろうかという想いが、ひたひたとおしよせてくる。

(北区・A・I)



血であがなったもの

鉄血勤皇師範隊／少年たちの沖縄戦

大田昌秀著 那覇出版社 1977年（初版）2000年（二版）

この本は私がまだスキューバダイビングを楽しんでいた頃のある年にダイビング仲間と沖縄に潜りに行った時に購入した本です。

ダイビングも最終日、宿をチェックアウトするときに宿のカウンター横にこの本が陳列されているのを見つけ、でもその時はもう時間もなかったため購入は断念。翌年同じ宿に宿泊しようやく入手した待望（？）の一冊です。

著者は当時沖縄県知事の大田昌秀さん。ご自身の少年時代の沖縄戦を鉄血勤皇師範隊としてくぐり抜けた体験談です。

あがなう（贖う／購う）は「つぐなう（償う）」と似た意味ですが、「あるものを代償にして手に入れる（g o o 辞書）」という意味合いが強く個人的には贖罪の意味合いが強いと思っています。

戦争で亡くなられた多くの方の命を犠牲にして生を掴んだ、生かされているすべての者が戦没者の「死」の持つ意味の重さを改めて考えるきっかけになるのではないかと思います。

沖縄戦が激しさを増してきた昭和20年3月31日沖縄師範学校の教職員生徒が鉄血勤皇隊として軍の指揮下に置かれた。

「すべてを抛って(放って)その任に殉ずる覚悟を決めるべきである。」要するに「郷土を守るために死ぬ覚悟を…」」。少年たちは誰言うともなく自分たちの人生は二十年を充たず終わることを知らず知らずに肯定していた時代である。明けて翌4月1日アメリカ軍の上陸がはじまったのである。

少年たちは軍司令部からのニュースを壕の隊員に連絡したり、水汲み、食糧運搬、弾薬輸送等の任務を遂行。それ

は砲弾飛び交う中での命がけの仕事である。

戦況が悪化してくると敵も見方も無く、日本兵が沖縄の民間人を殺すこともあったようで戦争と言う極限状態が如何に恐ろしいものか思い知らされる。

そんな中著者の大田さんも皆と同じく死ぬ覚悟というより国のために死ぬのが当たり前と思って居たが白百合隊の女性から言われた「生き抜いて下さい」と言う言葉で、当たり前前の「死」を疑問視し始めた。

否応なく戦争に巻き込まれていった少年たちの記録である。（京都市・渡邊昌吾）

暗幕のゲルニカ

原田マハ著 新潮社 2016年

2003年、アメリカのパウエル国務長官が国連安保理のロビーで記者会見を開いた。それは、イラクの大量破壊兵器の開発疑惑を理由として、イラク攻撃の開始を告げるものだった。その時、長官の後ろに本来ならば在るべき「ゲルニカ」のタペストリーには暗幕が掛けられていた。その事実からこの小説は生まれた。

1937年のスペイン内戦中、パリで「ゲルニカ」を制作するピカソと愛人だったドラ・マール、2003年、ニューヨーク近代美術館のキュレーター、2つの時代を行き来しながら展開する話は、この作者の常ではあるが、史実と虚構が判然としない。

ピカソという膨大な作品を残した巨匠のその作品群の中でやはり「ゲルニカ」は異彩を放っている。パリ万博に出品された縦約3.5m、横約7.8mの巨大な作品、微妙な色調のモノクロームの世界。爆破もない、被災した建物も、流血もない、戦争かどうかとも判らない、どこにもバスク地方の小村、ゲルニカの人類初の無差別空爆は表現されていないのにも関わらず、美術史上、最も強烈に戦争と平和の意

義を問う一枚の絵。「ゲルニカ」の制作過程を写真に収めたドラ・マール、彼女の視点で描かれるピカソ、小説であることをふと忘れてしまうような「ゲルニカ」に纏わる話の数々。若い時これだけは実物を観てみたいと、遠いマドリードの、名前もよくわからない美術館にいつか行こうと思っていたのに。

万博の後、ヨーロッパを巡回した絵はアメリカに渡り、そして 42 年間、ニューヨークに留まる。スペインに平穏が訪れるまで、ピカソの意志で。この世界から戦争という名の暴力がなくなる日まで「ゲルニカ」のメッセージは今も続いている。果たしてアートにどれだけの力があるのか。

解説に池上彰氏が、また「ゲルニカ」に暗幕が掛けられる日が来るのか？今のトランプ政権には、暗幕をかけるほどの疚しさを感じる人はいるのだろうかと問う。

(会員・ねこま)

文字と楽園 精興社書体であじわう現代文学

正木香子著 本の雑誌社 2017 年

本を読むとき、書体に興味を持って読むことはあるでしょうか？文字ではなく内容こそ大切であるのに、「精興社書体」という特定の書体に注目して読んだことはあるでしょうか？この書体は百年以上の歴史を持つ印刷会社「精興社」で作られた書体で、多くの作家、読者に長年愛されてきたそうです。この本では 10 人以上の作家を取り上げています。

例えば川上弘美の『センセイの鞆』は、三冊も手元にあることに著者自身が驚き、平凡社版は「石井中明朝体オールドスタイル」、文春文庫版は「凸版明朝」です。新潮文庫版が「精興社書体」で、「なんて心地いいのだろう。紙のうえに文字が生まれ落ちるさまを見ているような、精興社書体そのものを描写しているような文章だと思う」と書いて

います。三冊を比較することで、どのような書体で作品に出会うかによって感じ方が変わるとも述べています。このような読み方がとてもぜいたくで、奇跡だとも。その他三島由紀夫『金閣寺』、村上春樹『ノルウェイの森』、ミヒエール・エンデ『鏡の中の鏡』などを取り上げていて、著者独自の感覚的な見解ですが、本を読むとは実に深いものだと思わされます。

私が「精興社書体」に出会ったのは、読書会の課題本『岸辺のヤービ』（梨木香歩著 福音館書店 2015 年）でした。読了後ページ全体を眺めていて、特徴的なひらがなに気が付きました。そもそもひらがなが多く、字間行間が広がったことが幸いしたのですが、ひらがなのもとになった漢字を彷彿とさせる形が浮かび上がってきて、言葉では表現できない喜びが湧いてきました。出版社の編集の方に問い合わせ「精興社書体」を知りました。そしてこの書体が様々な本との出会いを作ってくれたと思います。このような本との出会いも読書の楽しみに加えてみるものいいのではないのでしょうか。

(会員・仏手柑)

究極の文字を求めて

松樟太郎著 ミシマ社 2018 年

中学生のころ、「自分文字」を作ることに夢中になった著者が、20 年経ち、世界や言語について知識が広まった今なら、もっといい文字が作れるんじゃないかと「究極の文字プロジェクト」をスタートした。言語学者ではなく、ビジネス雑誌の編集長である著者の、文字についての非正統派入門書。

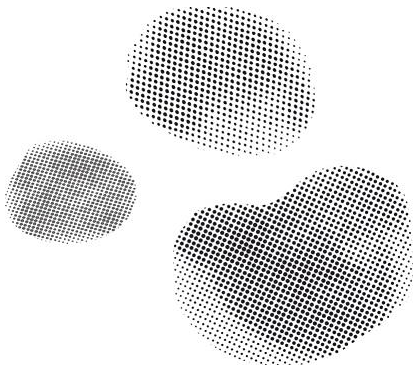
とはいえ「究極の文字」については、「おわりに」の章におまけのように書いてあるだけ。古代の文字や、マイナーな文字も含め 40 以上の文字を、著者の私見をたっぷり交えて紹介している。その文字の成り立ちや使用状況はメモ程

度。本文の大半は、その文字で芸能人の名前を書くかどうか、どの文字は頭に当たると痛そうか、ということが書かれている。ちなみに著者が「世界で一番で危険」だと感じているのがチベット文字。全体的に下に向かって尖っているかららしい。

ダジャレや芸能ネタを多用した凡例がこの本の魅力。しかし、読んでいくと当たり前に使っている文字について、改めて気づかされる。「ことば」ってよく使うけれど、「文字」と「言語」は違うものであること。NHKの語学講座に「ハングル講座」があるが、ハングルは文字の名前であって言語の名前ではないのでおかしいと説明されると、なるほどと思う。また、ひらがなのように子音と母音を同時に表す文字を「シラバリー」というが、アメリカ先住民族が使う「チェロキー文字」とかな文字のほか、数えるほどしかない、なんて書いてあると誇らしくなる。さらにこのチェロキー族は文字のことを「トーキング・リーフ」＝「言葉」と呼んでいたと知ると、ロマンすら感じてしまう。

言語や文字についての本には、地図がついているとわかりやすい。大阪の国立民族学博物館の「言語」コーナーには、壁一面の世界言語地図がある。次に行くときは、この本を片手に地図の前に立ち、危険な香りのチベット文字や、下から上に読むオガム文字などを探してみたい。

(会員・S・A)



帰れない山

パオロ・コニエッティ著 関口英子訳 新潮社 2018年

山を介して友情を育んだ男たちの物語です。

北イタリア、モンテ・ローザ山麓の寒村に両親に連れられて夏の間だけやってくる都会の少年ピエトロは、野生的な山の少年ブルーノに出会います。二人は山に分け入り沢を登り、廃屋に入り込み冒険を通して友達になりました。山を愛するピエトロの両親でしたが、母は低山を歩き花や樹を愛で村の人たちとお喋りを楽しむ。父はただがむしゃらに登頂を目指す登山を好みました。

その父に登山の手ほどきを受けた二人でしたが、思春期を迎えたピエトロは父への反発心から夏の山の家から遠ざかり、二人の友情も途絶えてしまいました。ブルーノもまた父親によって人生の転機を潰されていました。

時を経て、ピエトロの父は亡くなり、父が遺した山の土地で二人は山小屋建設に取り組みます。同時に友情の再構築もなされていくのでした。それが父の願いでもあったのでしょうか。また、登山を再開したピエトロは、かつて父が歩いたルートを辿り、幾つもの山頂で、岩間に置かれた登頂記録ノートに父の筆跡を見つけるのでした。

ヒマラヤを放浪するピエトロと故郷の山に根をおろすブルーノ。対照的に見える二人ですが、ともに孤独を好み父との確執を抱え、圧倒的な自然の中で自分に向き合います。氷河にアタックすることに喜びを見出す多くの登山家とは異なり、二人にとって山は自分の暮らしと地続きにあるものなのです。山は人生の全てを内包し静寂の中に立っているのです。時に荒々しく、時に優しく豊かな表情を見せながら。

心の襞に沁み入るような文章に幾度となく目を挙げ自分の登山体験を重ねて自然の描写に浸りました。それは暖かく切なく強く郷愁を掻き立てられるものでした。

(会員・ぼう)

REPORT 図書館友の会けやき総会

図書館懇談会とボランティア交流会

2019年6月14日

2019年度 けやき総会

会員16名と、来賓として市村左京図書館館長にお越しいただき、総会を開催しました。

市村館長より「図書館への支援・協力のお礼とともに、けやきの20年にわたる活動に敬意を表します。昨年は左京図書館開館40周年記念行事を行うことができました。今年度、職員の異動は2名でした。けやき20周年、左京図書館移転20周年を迎えます。新たな取り組みができたらと考えています。」とご挨拶いただきました。

永井代表は「図書館の活動への協力と、利用者の立場からの提案・要望を続けてきました。20年の間には、世の中の変化とともに、図書館の変化も見られ、その中で、試行錯誤の活動を続けてきたが、最近では、新しい仲間を迎えることの難しさを感じています。仲間が増え、図書館友の会が増え、さらに北東部にも中央図書館ができることを願っています。」と、図書館とけやきに対する思いを語りました。

次に、2018年度活動について、永井代表より「近畿公共図書館協議会で事例報告をしました。赤ちゃん絵本ふれあいタイム15年間、750回の取り組みを振り返るいい機会になりました。けやきの20年の活動についても、継続すること、記録し積み重ねることの大切さを実感しました。昨年は司書さんが提案・企画の行事に、けやきも協力しました。」と報告がありました。活動報告・会計報告ともに、承認されました。現在の会員は87名です。

参加者の自己紹介の中で、次のようなことが話されました。
・子どもが健診で読み聞かせしてもらったことが、けやきとのであいです。わが子の成長とともにけやきがある感じです。

・図書館へ利用者の声を届けるためにけやきのような活動が増えたらいいと思います。

・活動の継承ということにプレッシャーを感じますが、がんばりたい。

・出版業界へ関心を持ってほしい。

総会案内のアンケートに、次のような要望がありました。

・「けやきのHPを開いても、取り組みが過ぎてしまっていることがある。HPを開かなくても情報が届くようにしてほしい。」について、「大阪の図書館は登録すると月1回情報のメールが届くようになっている」という参考意見が出されました。

・「けやきの活動に多様な人が参加できるよう活動日時など考えてほしい」について、「土日に設定したこともありましたが、平日の方が参加しやすい人が多く、日程調整が難しい。」という現状が出されました。

2019年度予算と活動方針「20周年を機に活動を再点検し、次世代への継承のしくみ作りをする」が承認されました。

(田中)

第15回 図書館懇談会

総会終了から12:30まで図書館懇談会が行われました。参加者は左京図書館市村館長、神田司書、けやき会員15名でした。

まず、市村館長から昨年度の図書館の動向などについて報告がありました。年間来館者・貸出冊数はほぼ昨年並みで、現在の職員数は8名、臨時職員8名、ボランティア登録者14名で運営をしているということでした。主な取り組みとして、少年鑑別所への出張ブックトーク、社会福祉協議会の要請による成人の職場体験者の受け入れをしました。また、蔵書点検の期間を利用して、幼児コーナーのコルクカーペットの張替えとカーテンの取り付けをし、その他の設備もリニューアルをしたということです。

んが、大おさんのレシピをくれました。

みなはレシピを見て小物づくりやりょう理をしました。気がつくと、ようせいや、ま女のすんでいる世界へ着いていました。

わたしは、おさいほうが好きです。みなのように、レシピを見てようせいのいしゅうを作って、まだ読んだことのない物語の登場人物に会いたいです。
(小3・結生)

けやき
の
本棚

No. 59

大おさんの不思議なレシピ

柏葉幸子作 偕成社 1993年
中学一年生の女の子、みなは家てい科が大の
のが手です。なのに、みなは友だちのよう
に何か作りたいと思いました。するとお母さ

次に神田司書より、具体的な報告がありました。40 周年のイベントはすべて盛況であったこと、そのうち「ビブリオバトル」は秋の恒例事業として継続していくこと、工作会も好評だったので、回数を増やすなど充実させていくことなど、今年度の取り組み方について話されました。少年鑑別所への出張ブックトークは、今年度も継続し、年 4 回訪問することになっているということです。さらに現在児童コーナーで行っているお楽しみ会について、最近の傾向やスキルアップのために、他館の取り組みを見学することを検討しているそうです。

お二人の報告を受けて、まず、アンケートにあった質問をしました。本の情報更新や貸出準備の迅速化など普段の業務についての質問には丁寧に事情を説明していただき、できるだけ要望に応えるべく検討するということです。延滞者へ今より重いペナルティを課すべきではないか、駐輪場がいっぱいのことが多いので対策を、という要望については、今すぐに対応はできないと回答がありました。

続いて参加者から次々に質問や要望が出されました。他市で図書館の本が大量に廃棄されていた件については、設備の問題もあるがマナーの問題として啓発活動をしてはどうか。フロアワークの充実・絵本コーナーなどのリニューアルは利用者としてうれしいこと。神田司書からお話があった他館の見学はボランティアも参加できないだろうか。異動された職員の方の要望（お父さん向けの読み聞かせ講座）を受けて、更に対象を広げて、図書館で活動する人のための養成講座（マナー・ルールを含む）を、気軽に参加できる小さな講座形式で年数回実施できないか。そうすれば図書館ボランティア活動に興味を持った方のニーズに応えられるのでは。このような提案について、図書館側から前向きに検討し、実施できるように努力する旨の返事をいただき、期待膨らむ懇談会となりました。（北園）

あめだま

ベク・ヒナ作 長谷川義史訳 ブロンズ新社 2018 年
口にすると心の声が聞こえてくる魔法の「あめだま」。主人公の男の子ドンドン、普段聞くことの出来ないソファやベッドの犬の心の声を聞き、本当の気持ちを知っていきます。いつも、「おもちゃをかたづけろ」「ごはんはのこすな」と口うるさ

第 6 回 左京図書館ボランティア交流会

左京図書館に様々な形で関わるボランティアが集まって情報交換をする交流会が開かれました。図書館から高見副館長と、左京図書館ボランティア、赤ちゃん絵本ふれあいタイムサポーター、お楽しみ会ボランティア、けやき会員の計 17 名が参加しました。

・左京図書館ボランティア

現在 14 名が登録し、1 回 1 時間から 2 時間、月 1 回から週 2 回までと活動形態は人によって異なります。主に配架と書架整理をしています。経験者は簡単な本の修理をすることもあります。職員がボランティアに修理方法を指導することは、時間的、場所的に難しいというのが現状です。

・絵本学習会

定例の学習会以外に、年一回「えほんのひろば」を実施しています。来場者も増え、イベントとして定着してきました。また、学習会の一環として原画展などに出かけることもあります。新しいメンバーを募集するため、チラシやポスターを作成しています。

・赤ちゃん絵本ふれあいタイム

来場者が少ない時は、同じボランティアと情報交換をするなどしています。母親が子どもに本を読み、スタッフは本選びのアドバイスをすることもあります。

・左京図書館お楽しみ会

来場者が低年齢化していて、プログラムが組みにくくなっています。小学生の参加はほとんどありませんが、小学生たちが中の様子をのぞけるよう、絵本コーナーのカーテンは半分くらい開けておくのがよいと感じました。プログラムは、その月の担当者二人（司書とボランティア）が相談して決めています。司書さんと一緒に、他の図書館のお楽しみ会の勉強に行く機会があるといいです。

いお父さんから聞こえてきた心の声は、実は、「すきや すきや すきや…」と愛に溢れていました。しかし、ある男の子の声は、あめだまをなめても聞こえてきませんでした。その時、ドンドンは、自分から 1 歩踏み出す、成長を見せます。人形作家であり、アニメーションを 1 から学んだ作者独特の世界観も楽しめる絵本です。
（左京図書館・田中景子）

・図書館友の会「けやき」

ニュースレターを通じて「けやき」会員内での会の方向性の確認と、外への情報発信をしていきたいと考えています。設立当初から、既存のイベントを手伝うボランティアサークルではなく、利用者の立場から図書館に要望をし、その実現のためのお手伝いをするという立場でやってきています。

左京以外の図書館の利用者からは、図書館と連携して活動したいけれど、窓口をどこにしたらいいのかも分からない。左京図書館のように地域ぐるみで図書館を作るのが本来の姿だと思う。という声があがりました。また高見副館長からは、左京図書館では他館ではなかった催しなど、多くのことを経験できるので、他館でもこの経験を活かしたい、というお話がありました。(澤田)



TOPICS えほんのひろば in きょうと

—左京図書館 子ども読書の日記念事業から—

2019年4月14日左京図書館上階第1・2会議室

会場内のテントの中から、絵本を読む大人の声と子供のはしゃぐ声が聞こえる。キルティングシートに寝転がって絵本を読む子供がいる。おとうさんの胡坐の中にすっぽり納まり、絵本を読んでもらう子供がいる。オリジナルの栞づくりをしている子供もいる。その周りには、約350冊の絵本の表紙がずらりと並び、ボランティアスタッフがあちこちに控えている。「えほんのひろば in きょうと」は、こんな楽しいイベントです。10回目の今回は、子ども26人・大人20人が来てくれました。

今年は、赤ちゃん絵本コーナーを設け、左京図書館で毎週木曜日10時半から活動して下さっている赤ちゃんサポーターの方たちもスタッフとして参加。司書さんのお勧め絵本コーナーもあります。

毎月第4金曜日開催の左京図書館絵本学習会では、「えほんのひろば」を考案された加藤啓子さんのリストを元に、より「えほんのひろば in きょうと」を楽しめるように、並べる絵本リストの更新を順次進めています。

「えほんのひろば」は、子どもたちや絵本好きの大人だけでなく、読みがたりに使う絵本選びに困っている読書ボランティアの方々にも是非活用してもらいたいイベントです。その方たちへのイベント広報をどのようにするか。これが今後の課題です。(伊藤)

けやきの活動記録

2019年4月～7月

- 4/13 「えほんのひろば in きょうと」絵本仕分け・会場準備
- 4/14 「えほんのひろば in きょうと」開催
- 4/20 子ども読書の日記念行事おたのしみ会に協力
- 5/7 左京区福祉協議会ボランティア連絡会に出席(石川)
- 5/上旬～ニュースレター59号原稿作成・依頼・編集
- 5/10 活動報告・総会案内印刷発送
- 6/14 第21回定期総会、第15回図書館懇談会、第6回ボランティア交流会を開催
- 7/26 ニュースレター59号印刷・発送

<図書館おたのしみ会に協力>(第4土曜日)

4/27、5/25、6/22

<絵本学習会>(第4金曜日、3,7,9月は第2金曜日)

4/26、5/24、6/28、7/12

<事務局会議><図書館とのミーティング>

(主に第1月曜日)

5/10、6/3、7/5

<「赤ちゃん絵本ふれあいタイム」サポーター活動>

(毎週木曜日10:30～12:00)

4/4・11・18・25 5/2・9・16・23・30

6/6・13・20・27 7/4・11・18・25

図書館友の会 けやき の仲間になりませんか

知りたい 調べたい 本の世界を楽しみたい

そんな私たちの望みをかなえ 一人一人の世界を豊かにしてくれる場所

それが私たちの願う図書館です

京都市左京図書館が市民みんなの図書館としていきいきとあり続けるために、私たち市民利用者は何ができるのか考え、活動したいと1999年に「けやき」を立ち上げました。図書館のスタッフとともに、左京図書館はじめ京都市図書館を支え、育てていきませんか。

次のような活動をおこなっています

であいの森

左京図書館のおたのしみ会（毎月第4土曜日 11:00）に協力。
絵本を読んだり、ブックトーク・人形劇やおはなしも。

「赤ちゃん絵本ふれあいタイム」サポーター

毎週木曜日 10:30～12:00、左京図書館絵本コーナーで絵本探しのお手伝いをしたり、絵本を読んだりしています。

誰もが利用できる図書館を考える

図書館の現状を調べ、図書館に提案をしています。

ニュースレター編集部

友の会のニュースレター「けやき」を作成し、図書館と利用者を結びけやきの活動の情報を発信しています。

事務局

けやきの活動の企画提案。図書館行事に企画・協力。各グループ間や左京図書館との連絡調整を行っています。

絵本学習会

毎月第4金曜日 10:00～。取り上げた絵本をみんなで読み合い語り合う楽しい学習会です。

講演会・学習会

主催または図書館との共催で年に数回、地元の講師を中心に様々な興味深い講演会・学習会を行っています。

◆入会希望の方は年会費 500 円をそえ、下記郵便振込口座にお申し込み下さい。活動費の寄付も歓迎。

郵便振込口座 口座番号 00920-8-156914 番
口座名称 図書館友の会 けやき

◆入会・活動への参加などお問い合わせは下記の事務局へメールで。

◆図書館友の会けやきホームページをぜひご覧ください。
ニュースレターのバックナンバーも掲載しています。

けやき情報版

左京図書館絵本入門講座

10月4日(金)「えほんたいけん・えほんたんけん」
中川あゆみさん（名古屋女子大学講師）

10月11日(金)「やってみよう！読み聞かせ」

左京図書館司書さん

「科学の本のブックトーク」

島崎真紀子さん（京都科学読み物研究会）

いずれも 10～12 時、左京合同福祉センター3 階会議室（左京図書館の階上）にて。定員 70 名、事前申し込み不要

会員の出版物

『雨の日文庫』から図書館づくり運動へ

—子どもと本の出会いの場を求めて—

中川徳子、脇谷邦子、中西美季 編著 知書之屋本舗 2500 円

けやき会員でもある中川徳子さんの、ともに先駆的な活動として注目を集めた、子ども文庫活動と大阪府松原市での図書館づくり運動の経緯が、資料・年表とともに詳細に述べられている。

購入ご希望の方は永井（yakamasi_m@yahoo.co.jp）まで

編集後記

今号からニュースレター編集部に加わりました。手に取ってくださった方が読んでよかったと思えるような、豊かな紙面づくりを心がけたいと思います。夏休みがある方もない方も、「おすすめの本」特集をきっかけに新たな本との出会いがあることを願って。（澤田）

編集部に念願の新メンバー2名を迎えました。今号は久々に12頁と大部の号となりましたが、編集や版下作成を複数名で担えるようになり、力を出し合って完成に漕ぎ着けました。印刷・発送は従来通り、事務局の総力でお届けします。（島崎）

20周年を記す原稿のため、けやきホームページのニュースレターバックナンバーを読み返しました。最近、記録すること、継続すること、の大切さを様々な場面で痛感しています。ニュースレターが今後の活動の糧ともなりますように。（永井）

◇けやき 第59号 2019年7月26日

◇制作 図書館友の会 けやき ニュースレター編集部

題字：吉政 富美子 デザイン：伊藤 理恵子

◇発行 図書館友の会 けやき

HP : <http://totomo-keyaki.com>

Mail : info@totomo-keyaki.com